

平成 27 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	27K22	氏名	中岡 理和
研究主題 —副主題—	特別支援教育コーディネーターの学級経営支援 —Q-U と ASSESS を生かして—		
所属校	江東区立第三大島小学校	派遣先	早稲田大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>最近、荒れる学級を抱え学校経営に苦慮している学校が多いことを耳にする。その理由の一つとして考えられるのが担任による学級内の児童・生徒理解が十分できていない事が挙げられる。その児童・生徒理解不足が、教師の熱心な指導をマイナスに働かせてしまうことを目にしてきた。このような現状から、それぞれの学級がどのような状態か、何が足りないのかをアセスメントする方法や、その見立てからどうすればいいかを学年や校内委員会で語り合っていく場が必要であると考えた。</p> <p>これまで、問題を抱えて苦戦している児童・生徒に対して、教師の経験と勘を基にした見立てを行い、支援方法を考えていた。そこに児童・生徒の理解と支援のためのアンケートを使うことによって、経験と勘だけに頼らずに、客観的な情報収集をして見立てることで、効果的な支援の方法を考えることができると考えた。</p> <p>そこで、児童・生徒の理解と支援のためのツールとして、「Q-U (Questionnaire-Utilities) 楽しい学校生活を送るためのアンケート」(以下 Q-U とする) と「ASSESS (Adaptation Scale for School Environments on Six Spheres)」(以下 ASSESS とする) を取り入れた学級の見立てをして、児童・生徒の有効な指導・支援方法にいかすことを目的とした。</p>
II 研究の方法	<p>対象学級は公立小学校、第 1 学年 1 学級の実施となった。対象学級の区全体で、すでに Q-U を取り入れている。春に一回、秋に一回実施している。Q-U では、学級集団の状態や、子供一人一人の意欲・満足感などを測定できる。学級全体の状態を把握する「学級満足度尺度」で、学級集団全体として、ルールとリレーションがどのように確立しているかを知ることができる。ASSESS では、「生活満足度」、「学習適応」、「教師サポート」、「友人サポート」、「向社会的スキル」、「非侵害的關係」の六つの因子から学校適応感を捉えることができる。このような違う因子のアンケートを使うことによって、より有効な指導・支援方法を考えていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>ASSESS を実施する。</li> <li>観察で、集団をアセスメントする。また、集団の中で、個もアセスメントする。</li> <li>Q-U と ASSESS のデータと観察をもとに、総合的なアセスメントをする。</li> <li>結果をもとに、全体指導として取り入れられることを担任に提案する。</li> <li>担任の実践後、2 回目の ASSESS を実施する。</li> <li>対象の変容を見る。どのような支援が有効であったか確認をする。</li> </ol>

<p><b>Ⅲ 研究の結果</b></p>	<p>1 1回目の ASSESS のデータでは、学級平均が 40%以下の項目がなかった。ASSESS では 50%が平均値となっていて、40%以下が要支援項目となる。チャートの平均値を見ると、「教師サポート（担任の支援があるとか、認められているなど、担任との関係が良好であると感じている程度を示したもの）」が 46%で平均値よりやや低かった。個人別にみると「教師サポート」が、40%以下の児童は 6名であった。また、「友人サポート（友だちからの支援があるとか、認められているなど、友人関係が良好だと感じている程度を示したもの）」の学級平均は 50%を超えていたが、40%以下の児童が 5名、45%以下の児童が 8名いた。</p> <p>2 そこで、学級の中でどのようなサポート場面が見られるかを観察することにした。観察の結果、担任の支援や、児童同士の声の掛け合いなどが確認できた。</p> <p>3 調査から児童自身が「している」という自分の行動を自己評価する目は育っていても、「されている」ことを自覚する目は、十分には育っていない、つまり、他者理解が低いことが分かった。</p> <p>この結果から、学級集団をより良くするための方向性として ASSESS で課題として挙げた、「教師サポート」と「友人サポート」の数値を上げていくことを提案した。</p> <p>4 「友人サポート」の数値を上げるために、サポートしている場面を見かけたら、すぐにできていることをフィードバックする。「それが思いやり、これが協力」など概念化することなど、他者理解を促す働き掛けを提案した。また、「教師サポート」の数値を上げるために、現在できている、褒める、認める場面をより増やすことを提案した。</p> <p>5 2回目の ASSESS の結果として、学級平均では全ての項目で上昇が見られた。特に、「教師サポート」、「友人サポート」の数値はともに、6ポイントの上昇が見られた。また、「友人サポート」が 40%以下の児童が 5名から 1名になった。</p> <p>6 ASSESS のデータがあることで、教師自身が見えてなかった学級の実態を認識し、具体的な支援に移すことができたことを確認した。</p>
<p><b>Ⅳ 考察</b></p>	<p>児童・生徒の理解と支援のためのアンケートを使うことにより、客観的な情報を収集し、分析することが可能となり、有効な学級経営支援につながる事が分かった。</p> <p>課題として、教師の専門性の向上が挙げられる。教師が学級の的確な把握をするためには、情報収集の力を高めることと、それを判断する力が必要となってくる。そのためには、教師が共に学んでいける校内体制づくりが必要となってくる。</p> <p>また、コンサルテーションを行う際に、コンサルティールを主役にした取組が大事である。コンサルティールの思いや、学級を把握するポイントを聞き、教師が支援策を相互につくっていけるような取組が重要である。</p>